

第十章 託されたもの

1

《プルルル、プルルル》

呼び出し音が鳴り続けている。

携帯を耳にあてたむんのひたいには、うっすらと汗がにじんでいる。だが反対側から携帯に耳を押しつけている萌黄は全身に冷や汗が流れていた。

——ムチャムチャ、ドキドキする。

相手はコンサートにも行ったことのあるアルピスタ（アルパ奏者）の影松清香。人気上昇中のミュージシャンである。

むんの携帯は伊里江のパソコンに接続されている。通話はパソコンを通すことで、高度な暗号がかかるという。そのため、通話記録はどこにも残らず、自分と相手のどちらの居場所も特定されずに済むと伊里江は言った。

影松清香は萌黄同様、この世界に送り込まれた仲間のひとりである。それを知った時から萌黄は彼女と話したと思っていた。じかに会いたいと思っていた。

——ミーハー根性は否定でけへんけど……。

そう思ったりして、あれこれウジウジ悩んでいたが、SS広告で仲間を集める用意ができてつつある現在、清香に呼びかけるには絶好のタイミングではなからうか。

「そやね。あの人やったら信用できそうやし」

むんが同意してくれたので、時刻は午後九時を回っていたが、すぐかけてみようということになった。

とは言え向こうはこちらをまったく知らない。そんな相手と萌黄がいきなり話せるわけがない。いつものように応対するのはむんの役目となった。

《プルルル、プルルル、プチッ——もしもし?》

——わ、出た!

萌黄の身体から、さらに倍の量の汗があふれ出た。

「もしもし、影松清香さんでいらっしゃいますか?」

《そうですが……》

——独特のハイトーンヴォイス。まちがいない!

「突然お電話してすみません。わたくし、舞風むんと申します。影松さんの番号は揣摩太郎さんから教えていただきました」

《揣摩さん!?》

清香は驚きの声を上げた。むんはマイペースで話を続ける。

「じつは揣摩さんの口から、あなたが困っておられるとお聞きしました。影松さんは揣摩さんに『世界の左と右

が入れ替わった』とおっしゃったそうですね？」

《え、ええ》

「じつは今、すぐそばにわたしの友人がいるんですが、彼女も四日前の朝、突然左右が逆転する世界に放り込まれたんです」

《えっ》

通話はテレビ電話ではない。しかし顔は見えなくても、逐一判りやすい反応を返してくれるので、電話相手としてこんな話しやすい人もいない。

萌黄は清香にますます好感を持った。

「友人と代わりますので」そう言つて、むんはいきなり携帯を萌黄に手渡した。

「あわわ」

萌黄は心の準備もできないまま、送話口を自分の口許に持つていった。

《もしもし？》

「あ、は、初めまして、光嶋萌黄といいます。わたし、その——影松さんのファンです！ コンサートも行きました！ 楽曲も全部ダウンロードしました！ ふつつか者ですがどうぞよろしく！」

《ふふっ、こちらこそよろしく》

清香は笑い声を立て、ようやく口調がソフトな響きに変わった。

《光嶋さんは学生さん？》

「はい、大学一年生です。芸術学部です。出席率が悪くて留年しそうです」

萌黄は一生懸命に答えている。が、受話器の向こうではクククと笑いをこらえているらしい。

《光嶋さんと舞風さんはお友達なの？》

「ふあい、できた時からの親友です」

むんが腹をかかえて足をじたばたさせている。

《それで、あなたはどこで揣摩さんからわたしのことを？》

萌黄はハツとした。そうなのだ、本題を忘れてはいけないのだ。

「揣摩さんは——数日前、わたしの通う大学に入学されました。ちょうど口を利く機会がありました、わたしは自分の住む世界が、ある時を境に左右が全部反対になった話をしたんです。そうしたら揣摩さんが影松さんとお話しされた時、同じことで悩んでいるらしいと話されたんです」

《そうだったの——》

萌黄は話を端折ったが、清香は納得したようだった。

「あのー、影松さんも左と右が逆になったというのは、本当のことですか？」

萌黄はまず大事な点を確かめるべく、最重要の質問を

投げかけた。

《ええ、本当です。四日前の早朝、突然に》

「わたしとおんなじや——」

《あなたも？》

「はい、ええ、寝てる時でした」

《そう——》

「影松さん」 萌黄はシートの上で居住まいと正すと「お電話した理由はそれなんです。わたしたちはこの鏡の中のような世界の秘密を知っているんです。わたしたちのような境遇にいる仲間には他にもいます。いまその仲間と呼びかけて、集まってもらってるところです。だから影松さんにもぜひ来てほしい、そう思っているんですけど——」

《判ったわ、参ります》

清香は即答した。

萌黄と影松清香のファーストコンタクトは終わった。

落ち合う場所はいずれ連絡するということで萌黄は電話を切った。

ふーっと肩で息をついた萌黄に、運転席の久保田が声をかけた。妙にニコニコしているのは、電話のやりとりを聞いた余韻が残っているからだろう。

「お嬢さん、そろそろアンタのご自宅に向かってもいい

かい？」

2

「すいません、もう少し待ってもらえますか？」

「なあに、どうせ俺の行き先はただの実家だから、何時になったってかまやしないよ」

久保田は気楽そうに言うと、頭に巻いたタオルを解き、窓の外でパツパツと払う仕草をした。

その時、ポーンと彼の腕時計が時報を鳴らした。午後十時になった。

萌黄たちの乗るライトバンは現在、舗道を少し入った行き止まりに停車していた。道はずっと向こうからやってくる、すぐそこで右にカーブし、二日前パトカーに乗った萌黄が襲われた交差点へとつながっている。

あれはまだ一昨日のことなのだ。萌黄には何ヶ月も前のことのように思われた。

ライトバンの左には、舗道に沿って近鉄線のレールが延びている。もっとも道路とのあいだにはコンクリートの壁があるため、線路自体は見えない。

萌黄のマンションは、この道をまっすぐ下っていったところにある。車なら一分の距離。すぐそこだ。

「本当に誰かが待ち伏せてたりするんやろか」

むんが闇を透かして前方を見つめる。道路際に植わっている樹木が邪魔で、マンションの明かりは見えない。

伊里江はパソコンのキーを叩きながら、

「……敵も必死ですからね。あらゆる可能性を想定してリアルを追跡しているはず。私なら萌黄さんが生きて自宅にたどり着くことも考慮しますよ」

萌黄は身震いを抑えるように、両手で自分の肩をつかんだ。

「判ったから」 むんは伊里江の話にストップをかけ、

「エリーさんの仕事はまだ終わらへんの？」

「……あと一、二分ください」

伊里江はディスプレイをにらみ、キーを叩き続ける。

この袋小路に車を停めるよう指示したのは伊里江なのだ。『……十五分ください。マンションのセキュリティに侵入してみます』そう言うってから一度も顔を上げない。（おかげで清香さんとお話する時間があつたんやけど）

萌黄は清香との電話を思い出した。

清香は最後に、自分はいま岐阜市内にいるのだが、どちらに向かえばいいだろうかと質問してきた。

萌黄はあらかじめむんらと打ち合わせていたとおり、

『近江八幡を目指してきてほしい』と告げた。危険すぎて、大津に来いとはとても言えない。思い浮かんだのが

久保田の最終目的地だった。

『おじさまはもう寝たから、朝になったら伝えるわ。またお電話ちょうだいね』

通話時間が長びくと、それだけ敵に発信地を割り出される危険性が高まる。まだまだ話し足りなかったが、萌黄は泣く泣く通話を切った。

「……完了しました。見てください」

伊里江はパソコン画面を萌黄たちに向けた。

「うわっ、ほんまや、ウチのマンション！」

興奮した萌黄は、思わず画面を抱え込んだ。

縦横五×五二十五のマス目に仕切られた画面で、ひとつひとつにマンションの廊下やロビー、エレベータなどの空間が映っている。すべてマンションのセキュリティ対策として数年前に設置されたカメラの映像である。当時はプライバシーがどうのと自治会でも賛成派と反対派がもめたが、ここ数年、凶悪犯罪が連続していたため、反対派が押し切られる格好で設置されたのだ。

まさかそれがこんなところで役に立ってくれるとは。

「伊里江さんって怖い人やね。こんなことまでやってしまっなんて」

「……大したことではありません」

伊里江にはむんの皮肉は通じなかった。

萌黄はズラリと並んだマス目の中に、墨で塗り潰したような黒いマス目があるのに気がついた。キャプションを見ると『6F』と書いてある。萌黄の家は六階にある。他のマス目に目を転じて、やはり六階の映像だけが何も映っていないかった。

「なんで？」

むんも伊里江も顔を寄せる。

「……ブラックアウトですか」

「カメラが壊された？」

萌黄はがっくりと肩を落とした。

「やっぱりおるんやね、敵さんが……。そんなところへノコノコ帰宅しようなんて、無茶な話かなあ」

「……あきらめるのは早すぎます。私が準備したのは、これだけではありません」

伊里江はマウスを動かし、別の画面を映し出した。濃紺のバックに、白い線で描かれた図形がいくつも交錯している。

「……これはマンションの上面図、すなわち真上から見たところです。ところどころに動いている光点は、オン状態にある携帯です」

萌黄は、伊里江の隠れ家で見た立体地図を思い出した。この図は、携帯電波の位置情報をハッキングし、立体地図ソフトで読み込んで作ったのだろう。

「蛭みたいなのがみんな携帯電話なんやね。二十個はあるよ」

「……ただ残念なことに、どの光が何階なのかまでは突き止められません。せめて二、三十メートルぐらいまで接近すれば可能ですが」

喜びは束の間だった。萌黄はもう一度肩を落とした。

「結局は近くまで行かんと敵の位置はつかめないってことやね」

「……これでせいっぱいです」

「ううん、よくやってくれはったわ。感謝してます」萌黄は無理に笑顔を作ると、「わたし、エリーさんのパソコンを担いで、ひとりでマンションに戻ってみるわ」

3

アホなこと言わんとき、とむんは叱りつけた。

「無茶な話やって、アンタ自分で判ってるくせに」

「そうやけど……それでもやっぱり取りに行きたい。」

だって」萌黄は伊里江を見た。伊里江は画面の上を微妙に動く光の軌跡をマウスで追っている。迷彩服の疑いが濃厚な光点を抽出しようと躍起になっているのだ。

「——わたしのパソコンには、これまで何年も蓄えてきた自前のソフトウェアがいっぱいあるんよ」

「知ってるって」むんが叱り口調を保ったまま言う。

「ううん、本当には知らんと思う。わたしとエリーさんは互いに知り合ってからずっと鎬しのぎを削り合ってきた。少なくともエリーさんと張り合えるくらいの自信はあるつもり。なのに——今のわたしは何も持つてへん。これじゃ刀を持たへん侍、ハサミを持たへん床屋、釣り竿を持たへん漁師よ」

タオルを巻いた久保田の後頭部がピクツと動いた。

「役立たずのまま、これ以上時間を無駄にしたくない。家のパソコンを持ち出せたら、せめてエリーさんのお手伝いくらいはできる。そやから、わたしを行かせて、ね？」

むんは激しく髪を揺らし、車の天井を振り仰いだかと思うと、

「萌黄が行くなら、わたしも——」

「アカン！」躊躇なく萌黄は遮った。「今度ばかりはついて来てほしくない。敵は確実にいるんやし、むんは面も割れてるし——」

ひ弱なヴァーチャルだから……とは言えない。

「ほなエリーさんに、エリーさんについて行ってもらたらええんよ。同じリアルやし、一度は迷彩服を撃退してるやん」

むんの声は悲痛な色を帯びていた。萌黄のことを心底

心配しているのだ。

しかし伊里江は冷たく言い放った。

「……萌黄さんと私がふたりとも敵に捕えられたらどうします？　世界を救う望みは消えてしまうんですよ。行くというなら止めはしませんが、ここは萌黄さんひとりで行ってもらうしかありません」

「ひどい！　アンタそれでもオトコ!?」

むんのいら立ちが怒りに転化しようとした、その時、

「俺がお供しましょうか？」

運転席からおどけたような声が飛んできた。

「久保田さん」

「口出して申し訳ない。いえ、話はまったく見えないんですが、そちらの萌黄さんがこれから帰ろうとしてる家には物騒な連中が待ち構えてるんだって？　それぐらいは判ったような」

久保田はフロントシートの間から身を乗り出すと、

「——ここんとかお客もなくてホテルの仕事も暇だったから、若いのとテレビばかり見てたんだ。どの局も報道番組だらけ、キナ臭いニュースだらけだったな。解説者も「理解できん」の連発だ。見てるこっちはさらに判らない。」

ただ、おとつい辺りにウイルスだっけ？　おかしい病気が日本中で猛威を奮い出したって噂が流れてからだよ、

世間が物騒になったのは。都心に現れた大将がどーとか、長野防衛軍がどーとか。いったい世の中はどんなつちまったのかねえ。

——俺は生まれも育ちも東京の下町で両親はもういない。近江八幡で俺を待ってるのは妹夫婦だ。気丈な妹が少々頼りない旦那、それにまだ小さい息子といっしょに細々と暮らしてる。ところが近所で大きな事故があつたらしく、人がたくさん消えたとかで妹がえらく怖がつてる。だから行つておまえらを守つてやるつて、大見得を切つちやつてね。

——俺のオツムはあんまし利口じゃないけど、お嬢さんがたの話を聞いてると、世間の不穏な空気に関係してるような気がした。そうじゃありませんかい？」

萌黄は頷いた。

「だったら江戸っ子として捨てちゃおけません。俺がついてつて差し上げますよ」

そこまで言うと、久保田はエンジンを切り、止める間もなくドアを開けて外に出た。

萌黄も追いかけて車外に飛び出したが、久保田は口笛を吹きながら、どんどん道路を下っていく。萌黄は後を追うしかなかった。

久保田は暗い夜道を、大股でゆつくりと歩いていく。

巨体をぴっちりしたポロシャツとジーンズに包んだ姿は、どこことなくユーモラスでもある。

車を離れる際に、萌黄は自分の携帯電話に伊里江の携帯追跡プログラムを転送してもらったおいた。

「いい月夜だねえ」

月——ヴァーチャル・ムーン。

萌黄は久保田の言葉につられて空を見上げ、月光に照らされた町並みを見やった。こうして眺めている限り、世の中は平和そのものなのだが。

「お嬢さんのマンションはどれですかい？」

萌黄はあれですと指さした。

距離にして五十メートル。

萌黄は右手の中の携帯をオンさせた。ぼわんとホログラフィの画面が浮き出した。まだ遠すぎるらしく、うごめ蠢く螢の画像は先ほどとあまり変わらない。

しだいに緊張が高まってきた。

ふたりはマンションの下に到達した。

建物は月に照らされた壁面を舗道側に向けていた。萌黄たちは、地下駐車場へと続くスロープを前にして、自宅のある六階を仰ぎ見た。光嶋家の扉は共用廊下の外壁がじゃまして確認できない。ただその辺りの壁面にこびりついた黒い煤は、二日前の襲撃をイヤでも思い出させた。

明かりの漏れる窓はほとんどなく、マンションもその周囲も森閑としている。

久保田は尻ポケットに突っ込んでいた別のタオルを引き出し、「ほれ」と萌黄に差し出した。萌黄は久保田の意図が読めず、首を傾げた。

「お嬢さん、アンタさつき、面が割れてるのどのと言わなかったつけ？　これを俺みたいに頭に巻いてごらん。見た目が変わるよ」

（本当だろうか？）

萌黄は疑問に思いつつ、受け取ったタオルを巻いてみた。

「あと、Tシャツの袖口もこうまくり上げて——そうそう、いい感じだ。漁師の息子が一丁上がりだね」

（うれしくない）

「俺と並んだら、兄弟が遊び疲れて帰ってきたって風に見えるんじゃないかな。ハハハハハ」

（どうせわたしはチビで、女っぽくないですよ！）

萌黄はすねた顔をしてみせたが、内心はありがたかった。正面から敵の中に入り込むというのに、変装するぐらいの考えが浮かばなかった自分は、こんなシチュエーションには不向きなのだろう。

（でもタオルを巻いたぐらいで変装といえる？）

「さあ、肩の力を抜いて、さりげなく参りましょう」

「はい」

ふたりはついにエントランスの正面までやってきた。

萌黄はポケットから鍵を取り出し、横壁のインターホン下にある鍵穴に差し込み、回転させた。自動ドアはグイーンという音とともに開き、ふたりはライトに明るく照らされたエントランスに足を踏み入れた。

緊張がいやが上にも高まっていく。

住民用の戸別ポストの前を過ぎると、管理人室がある。そこにはマンション全体の監視カメラをチェックするモニターがあるはず。敵が隠れているとすれば、まず最初に思い当たるのがこの部屋だ。

萌黄はバッグに手を入れ、伊里江から預かった銃の感触を確かめた。一度は揣摩が奪い取り、加太で再び伊里江の手に返された。萌黄には扱う自信はまったくなかったが、お守りの代わりだと渡されたのだ。

管理人室の窓が近づいてくる。

一瞬、何かが動いたような気がして、萌黄は身構えた。

4

「久保田さん」

萌黄は叫んだつもりだったが、言葉にはならず、出たのはかすれ声だった。

全身の関節がまるで油の切れた自転車のようだ。ギシギシとイヤな音が鳴り、歩いているだけなのに思うように動いてくれない。しがみついた久保田の太い腕にただ引きずられていくだけだ。

「お嬢さん、黙って見ていなさいよ」

久保田がふいに小声で耳打ちした。

（へ？ 何？）

あわてて問い返そうとしたが、

「ああゝあゝ」

突然、久保田は奇声を上げて、膝から床に崩れ落ちた。萌黄の顔面が引きつった。血の気が引いていくのが自分でも判った。

（撃たれた——!?）

久保田は肩口から床の上に転がると、そのまま管理人室のガラス戸に背中からぶつかっていった。

「俺は酔ってないぞ。断じて酔ったりしてましえーん」

呂律ろれつがまわっていない。久保田はいつ酒を飲んだ？

そんな不審感を抱かせたが、それも一瞬だった。

（演技してる！）

すると久保田は欠伸をかみ殺しながら、萌黄にウインクしてみせた。

「おおい。管理人さん、いるかい」

久保田はもたれているガラス戸を拳でドンドンと叩い

た。萌黄には演技と判っていても、冷や汗の出る状況であることはまちがいない。

「管理人さーん。……なんだ、いないんじゃないかよー。職務怠慢だぞー」

久保田は尻餅をついたまま、ふてくされた顔つきで管理人室を覗き込む。

もう萌黄にも彼の意図は伝わっていた。中に敵が隠れていないか、それとなく——荒技だが——調べてやろうというのが最初からの魂胆だったのだ。

久保田は正面を向き、にやつと笑みを浮かべた。どうやら管理人室は無人らしい。萌黄に向かって、起こしてくれよーと手を差し出す。

「父ちゃん、もうグロッキーだよ——ってコレ死語かいねー？」

（さつきは兄妹なんて言ってたくせに、わたしに娘を演じさせるつもり？）

萌黄は両手を差し出し、久保田の巨体を引きずり起こした。久保田はどっこいしょと勢いをつけて立ち上がった。

いつの間にか萌黄の緊張は解けていた。管理人室には誰もいないと判明したこともあるが、それ以上に久保田の酔ったふりが堂に入っていて、思わずあつけにとられたことが大きいだろう。

「さあ、父ちゃんをエレベータまで連れていってくれ」
萌黄は久保田を背負った姿勢で前進し、エレベータの扉の前に来ると壁のボタンを押した。

エレベータは二機あり、一機は一階で止まっていた。
扉はすぐに開いた。萌黄は熊のように覆い被さる久保田と歩調を合わせてエレベータに乗り込んだ。

久保田は手足を放り出すと、今度は床の上に大の字になった。あくまで酔いつぶれた親父を体現している。もはや演技と判っているので、萌黄はあわてずに『閉』ボタンを押し、腕を腰にあてた格好で久保田を見おろした。親父の酒癖に困る子供の図である。

（——本当のお父さんとこんなふうに接したことは一度もなかったな）

萌黄の心にふっと影がよぎったが、打ち消すように首を振ると、久保田のそばに両膝を折ってかがみ込んだ。

「天井の端にある出っぱり、あれがカメラだね？」

久保田は目を閉じたまま、虫の鳴くような声で問いかけた。

（えっ？）

「眼を上げない」

久保田が早口で注意した。萌黄はピクツとアゴを動かしただけで踏みとどまった。

「そ、そうです。でもマイクはないからしゃべっても大

丈夫ですよ」

「あ、そう」

ふーっ。久保田の口から息が漏れた。

天井の蛍光灯がふたりの顔に陰影を作っている。

この距離で見る久保田はかなり無骨な顔をしていた。小さな眼と隆起した頬は萌黄に木彫りの彫刻を連想させた。漁師のイメージにぴったリと言いたいところだが、細い眉はどこか繊細さを感じさせる。

久保田はこのマンションにいるあいだ、酔った親父を演じ続けるつもりらしい。カメラが四方から見ている状況だし、おっかなびつくりで潜入するよりも、そのほうが動きやすいと判断したのだ。

そこまで腹をくくってくれているのなら萌黄も合わせるしかない。素人の演技でもロボットのようにな緊張でギクシャクした動きよりはマシだろう。

萌黄は閉じた扉を振り返り、階数ボタンに手を伸ばした。しかし『6』を押しかけた指が一瞬ためらった後、

『5』を押した。

「おんや、六階じゃなかったのかい？」

久保田がわざとらしく間延びした声で訊ねた。

「失敗失敗。まちがえちった」

萌黄は舌をぺろっと出してみせた。わざとらしさは互角だ。

エレベータは緩やかにスピードを落とすと、音もなく停止した。表示階数は五階。いよいよ敵の陣地に乗り込むのだ。

（わたしの家なのに）

扉が開いた。全身が粟立つ。

物陰から銃弾が飛んでくる――！。

そんな恐怖に駆られ、頭だけを覗かせて外の様子をうかがおうとするのを、かろうじて押しとどまった。

（防犯カメラが見てる。怪しまれる行動はできない）

萌黄は「起きて」と、床に延びている（ように見せかけている）久保田を揺り起こした。

緊張感が萌黄の全身を包み込んでいく。唯一の頼りはこの久保田だけだ。

萌黄の肩を借りて立ち上がった久保田は、ゆるゆると廊下に歩み出た。足取りは誰が見てもそれとわかるほどの“千鳥足”で、依然、酩酊状態の看板を掲げ続けている。

（敵の眼にもそう映りますように）

仄暗い電灯に照らされた共用廊下のどこにも、怪しい者の姿はなかった。

「もう一階、歩いて昇るんですな？」

久保田が萌黄の頭頂部にささやきかけた。

「直接、六階に着くのが怖かったんです」

「いや、それでいい」

萌黄は久保田の重い身体を全身で支えながら、廊下を左に折れ、階段部へと進路を取った。

鏡像のように正反対の間取り。知らない土地を逃げているあいだなら戸惑うことはなかったが、馴染み過ぎた場所だとそうはいかない。記憶と目に映ったものが頭の中でせめぎあう。喧嘩する。

（わたしまで酔ってしまいそう）

ふたりは道路側に面した階段にたどりついた。

そこにも誰もいない。

「カメラはちょうど今、わたしたちの頭上にあります。階段の途中にある踊り場まではこのカメラ、その先は六階のカメラが捉えるようになっていきます」

「死角はないのかい？」

「踊り場の中央が少しだけ」

久保田は左右に身体を揺らしながら階段に足を掛ける。萌黄も遅れじと昇っていく。

踊り場で階段は百八十度に折り返している。そこは見晴らしがよく、空中に突き出した展望台の感があった。

「ここから玄関が見えるんです」

あん？ とアゴを動かして久保田が反応する。

直線距離にして十数メートル。廊下の側壁の向こうに、我が家があつた。月光を浴びた扉は堅く閉じられている。

「久保田さん、カメラの影になつてもらえませんか？」

「おう」

久保田は立ち塞がるように、広い背中を六階に向けた。萌黄は間を置かず、バッグから携帯を取り出す。

（いたっ！）

立体映像は、六階に存在するただひとつの光点を示していた。それは萌黄の家の中にいた。

「敵は我が家の一番奥に潜んでいます」

久保田はわずかに頷いたが、

「ん？ 文字が」

萌黄はビックリした。どうして久保田が自分のPAIの名を知ってるのか、と驚いたのだが、そうではなかった。

画面には、六階フロアの間取り図の脇に、小さな文字が現れていた。

『むんより。わたしたちはすぐ下まで来ています。必要があれば連絡して』

萌黄は小さく叫んで、踊り場の手すり壁に身を乗り出した。

道路脇の灌木のそばにライトバンは停まっていた。暗

くて見えないが、むんも伊里江もそこにいる。そう思うと萌黄の胸に熱いものがこみ上げてきた。

（きつとむんが強引にエリーさんを説き伏せたんやろうな）

返信メールを打ちたかったが、ギドラに忠告されて以来、萌黄の携帯は居場所を探知されないよう、電波が届かないようにしてある。

「さ、前に進もうか」

こんなところでじっとしているのは十分に怪しい。萌黄は促されて久保田とともに階段を昇り始めた。

いよいよ六階だ。萌黄の足も自然と重くなる。

「お嬢さん——萌黄さん、君の——」

久保田の話しかける言葉が、ホテルの客に対するものから、兄が妹に向かつて語りかけるような口調に変わっていた。萌黄にはそれがとても自然なことに思えた。

「君の家族構成は？」

「母とわたしだけです——でした。亡くなったのはついおとついです。父はずっと以前に出て行きました」

「……………」

久保田は涙をすすりながら、くいつとアゴを空に向けた。

「飼猫のウイルスも……母もあの家で殺されたんです。わたしを狙って押し入った迷彩服の手にかかって」

萌黄の脳裏にあの日のことがまざまざと蘇る。

しかしそんな思念をパンパンツという音が遮った。久保田が自分の両頬を両手で叩いたのだ。そのまま力を込めて顔を両側から押している。目も鼻も口も縦に伸び、変な顔になっていた。

萌黄は吹き出さずにはいられなかった。

「アハハハハ」

「ハハハハハ」

久保田も笑う。そして萌黄の肩にポンと手を置くと、

「さあ、行こうか」と言い、彼女の腕を引いた。

ふたりは防犯カメラの下を通過した。

久保田は敵の存在など気にしないかのように、ズンズン廊下を進んでいく。その姿は無防備そのものだ。

廊下はT字路にさしかかり、こつちと萌黄が久保田の腕を引っ張って順路を示した。

とうとうふたりは『光嶋』の表札のある扉の前に到着した。緊張と興奮で萌黄の頭は爆発寸然だ。

鍵はかかっているのか？

それとも開いているのか？

萌黄はポケットをまさぐって鍵を取り出そうとしたが、それより早く久保田は拳を振り上げると、ドンドンと扉を叩き始めた。

「おおーい、姉さーん。俺だあー、開けてくれー」

（何考えてんの、この人）

今にも銃弾が降り注ぐのではないか!? 扉の向こうからバズーカ砲が火を噴くのではないか!? そんなことばかり頭の中に去来し、萌黄は生きた心地がしない。

考えてみれば——みるまでもなく、久保田は迷彩服たちのことなど全く知らないのだ。彼らの容赦ない攻撃も、執拗な追撃も、一切知らないのだ。

おそらく久保田は、不良の集団かごろつきぐらいにしか思っていないのだろう。だからこんな不用意な行動ができるのだ。

力まかせに扉を叩いていた久保田がふいに振り向いた。

「なあ、お母さんの名前は？」

「えっ——景子です」

するとまた扉に向き直り、

「ケーコ姉さん、弟の陽平ようへいです。久しぶりに海から戻ってまいりましたー。どーか不肖の弟めに顔を見せてやってくださいーい」

大音声である。おそらくインターホンでなくても部屋の中まで届いていることだろう。

中にいる敵はどんな反応を示すのか？ 萌黄には一秒

一秒がとてつもなく長く感じられた。

「おーい、いないのかー」

久保田は徐々に叩き疲れたというように扉にもたれかかり、ズルズルと床に膝をついた。

あくまで演技中なのだ。萌黄の母を姉に見立て、酔った弟が夜中にいきなりやってきたというシーケンスを、台本なしに実演中なのである。

「いないのかよお……ありゃ」

手をかけたドアノブを手前に引くと、驚いたことに、扉がスーッと開いた。

「開いてるじゃないか。なんでだよー不用心だなー」

相変わらず大声でわめきながら、すでに首を扉の隙間に突っ込んでいる。

「もしもーし」

（今度こそ撃たれる！）

萌黄は何度、血が逆流したか判らない。廊下の手すり壁に背中を押しつけたまま、ずっと硬直したままだ。

「電灯も消えてるぞ、留守かあ、まいったなあ」

久保田はしきりに頭をかいて困っている様子だったが、「しかたがない。父ちゃん、これ以上は歩けないから、一晩ここで泊まらせてもらおうじゃないか」

萌黄に対してそう言うと、扉をヨイショと押し開いた。そして萌黄についてくるよう無言で合図を送った。

（まさか、家の中には誰もいないとか……？）

久保田はすでに靴を脱いでいる。明かりのスイッチを押すと、リビングにつながるフローリングの廊下が平気な顔をして歩いていく。

（やっぱり誰もいてへんのやろか……警察の人がうつかり携帯を置き忘れていったとか）

萌黄の緊張の糸がゆるみかけた、その瞬間だった。

「止まれ」

ドスの利いた低い声が、リビング奥の闇から発せられた。

玄関に佇^{たたず}んでいた萌黄の目にも、久保田がビクツと身体を震わせたのが判った。

（おったんや！）

リビングがパツと明るくなった。電灯のスイッチが入れたのだ。

久保田は反射的に明かりから目を遮った。彼はスイッチなどは触っていない。電灯をつけたのは——敵！

そいつは真正面にいた。

玄関からまっすぐ延びた廊下がリビングに達し、その延長線上には厚みのある一枚ガラスが内外を仕切っている。

そいつはガラスを背に、両脚を投げ出す格好でリビングに腰をおろしていた。萌黄が首を動かすと、そいつが

久保田に向かって構えている銃の筒先が見えた。

（迂闊^{うかつ}すぎる！）萌黄は舌打ちした。（策もなしにホイホイ帰ってきて、敵の術中にハマるやなんて……アホもエエとこや）

萌黄は腹の前でぎゅっと拳を握った。

「ア、アンタ、何者だよ。なんでここにいるんだよ。なんだよその銃は」

久保田のおろおろとした声が響く。本気か演技か区別がつかない。

「そういうお前は誰なんだ？ 夜中に人ん家^ちへ断りもなく入ってくるなんて」

萌黄の頭の隅で、何かが光った。

その声には聞き覚えがあつた。

「ここは俺の姉、景子の家だ。アンタみたいな男は家族にはいないはずだ」

リビングの入口に立ったまま、久保田が反論する。

「なんだ、ここの連中の親族か」男は笑うと「その景子とかいう主婦は死んだよ」

「死んだあー!?」

久保田は一步前に出た。

「そうだ。死んだ。ついでにお前も死ぬか？」

男が銃を構え直した。

（ここまでか——!?）

萌黄がガツクリと壁に肘をついた時、久保田の口から予想もなかったセリフがこぼれ出た。

「アンタ……岩村じゃないのか？」

7

「あん？」

男の顔から笑みが消えた。

「何だと？」

「岩村だろ？ 岩村利彦^{としひこ}」

「誰だ、お前！」

岩村と呼ばれた男は、射すくめるような眼光を放ちながら、閉じたカーテンを背にゆっくりと立ち上がった。

カーテン柄が華やかなだけに男の迷彩服がひと際違和感をそそる。銃口は依然として相手に向けられたままだ。

「名前は、名前は何という？ 言え！」

殺気に満ちた男の瞳に、激情のうねりが走った。

「久保田だ。久保田陽平だよ」

「久保田陽……」

ひたいにかざしていた手をゆっくりと下ろした久保田は、

「このツラを忘れたとは言わせねえぜ、イワ」

ぐっと顔を突き出した。

すると男はウウツとうめき、驚きとも喜びともつかない声を上げた。

「ウソだろ、おいホントに久保田か……信じられねえ」
久保田はホッと息を漏らし、意識して相好を崩すと、自分の顔をさすりながら、

「まあヒゲもはやしてるし、パツと見^みは判らんだろうかな」

「判るもなにも、いったい何年ぶりだ？ 大学院で机を並べて以来だぞ」

「十五年ぶりか。お互いにトシをとったわけだ」

「しかし、信じられねー」

（信じられないのは、俺のほうだつーの）

久保田はここまで深く考えることなしに突進してきた。腕力には自信があつたので、少々ヤツが出てきても、適当に懲らしめてやればいいぐらいに思っていた。酔った演技をしたのは、敵を欺いてうまくふところに飛び込んでやろうという茶目っ気がさせたものではあつたのだが。

しかし待ち構えていたのが、コマンドーのような重装備に身を包んだ旧友だったとは。

（安心しちやいけねえ。俺にとっては昔懐かしい友人であるうと、萌黄さんの命をしつこく付け狙ってるヤツだ。俺が彼女の盾になってやらなくては）

岩村の銃は久保田を外れて床を向いた。だが状況はま
だどう転ぶか判らない。ここが演技のしどころと久保田
はヘソに力を込めた。

岩村は呆然としたように、久保田の全身を見回し、
「久保田よ、お前なんでこんなところにいるんだ？」

「なんでって、オマエ」久保田はタオル越しに頭をバリ
バリとかきながら自分の役柄を思い出すと、「姉貴に会
いにきたのよ」と、よどみなく答えた。

「そういや、さっき表でそんなことを叫んでたな」

「酒のんでたんてな。つい喚いちゃった」

テレたように、また頭をかいてみせる。

「けど……オマエに姉貴なんていたっけ？ 一度オマエ
ん家に遊びに行ったことがあったが、兄弟はトシの離れ
た兄貴ひとりだったんじゃない——」

「姉貴つつつても義理の姉だよ。その兄貴の嫁さんさ。

もつとも数年前に離婚しちゃって、今は子供と二人暮ら
しなただけだな」

「ほう」

ここに至ってようやく岩村の眉が開いた。久保田の詳
しい説明が岩村の疑惑を解いたようだ。

（気を抜くな）

背中を滝のような汗がたっている。久保田は頭のタ
オルを自然な動作で外すと、そ知らぬ顔で首筋の汗だけ

を拭った。

「今度は俺に質問させろよ、イワ」

「む」

「なんでオマエがここにいるんだ？ さつき、死んだとか言ってたが、まさかオマエが!？」

久保田は疑惑と憤りを言葉に込めて、岩村に詰め寄った。

「待ってくれ。これには深い事情があるんだ」

「深い事情だど？」

体格はふたりとも似たり寄ったりだが、身長は久保田のほうが拳ひとつ高い。近寄れば久保田が岩村を見おろすことになる。

久保田の眼光に岩村はたまらず視線をそらした。

「話すと長くなる。まあ、そのソファにでも腰かけてくれ」

「……………」

リビングはダイニングを兼ねているため、広いフロアリングの上には、食卓の他にソファセットが置かれている。

久保田はじっくりと間^まを取ってから、巨体をソファのほうに向けたが、ふと気がついたという顔で、

「息子に聞かせるような話じゃないよな？」

「息子？ あ、ああ」

岩村は完全に久保田の氣迫に圧おされている。

（この場の主導権は俺が握った！）

そう確信した久保田は、玄関の萌黄に声をかけた。

「おい、も——萌平もへい！」

萌黄は靴を脱いだすぐのところに立ちすくんでいたが、自分に呼びかけたらしいと知ると、胸の前にバッグをかかえたまま、あわてて頷いた。

久保田も頷き返すと、

「父さんたちは、少し込み入った話をしなけりやならん。オマエ、どこかその辺の部屋に入って休ませてもらえ」
萌黄はさらに大きく二度頷き、迷わず自分の部屋の扉を開け、するりと中に飛び込んだ。

8

部屋は真っ暗だった。

すぐに壁のスイッチをまさぐったが、ハッと気づいて反対の壁に手を伸ばした。

電灯がつくと、部屋は萌黄が出て行った時のままだった。左右反対の勉強机。左右反対のベッド。揣摩太郎のポスターも逆を向いたまま。

萌黄はバッグを放り出すとベッドの上に腰かけた。やわらかい布団がふわりと萌黄の尻を受け止める。

ふいに萌黄は、このまま眠ってしまいたい、という欲求にかられた。このまま朝まで眠れたらどんなに気持ちがいいだろう。枕カバーに描かれたキャラクターも萌黄においでおいでをしている。

（アカン、悠長なことを考えてる暇はないんや）

そう。状況は一刻を争う。

萌黄は首を激しく振り、ベッドから尻を引きはがした。そしてパソコンデスクに鎮座している愛機、デスクトップ型最新iMacのディスプレイの前に座った。

スイッチをオンにする。ブウンと起動音が鳴る。

OSが立ち上がるのを待っているあいだ、萌黄は書棚から別のノートパソコンを取り出し、こちらの電源もオンにした。

ノートパソコンはPowerBookで、やはりMacだが、A5サイズの超コンパクト型だ。萌黄はiMacに記憶させてある重要なファイルやツール群を、このPowerBookにコピーして持ち出すつもりなのだ。起動を終えた二台のパソコンをケーブルで接続すると、間髪を入れずにファイルの転送をスタートさせる。画面に所要時間は『五分』と出た。かなりの分量だ。

あとはただ待つしかない。

（リビングのほうは、どうなってるやろ？）

気になるが、ここからでは何も聞こえない。ただ、静

かなところをみると、ふたりの話し合いは続いているようだ。

（久保田さんが、迷彩服と友達やったなんて）

おかげでファイルを持ち出すことができそうだ。

しかし無事に逃げ出すまで、油断は禁物だ。何しろ敵は血も涙もない“迷彩服”なのだ。しかも――

（岩村というあの男、一度は自分たちを殺そうとした）

「リ・ア・ル？」

「そうだ。俺たちはリアルを掃討するために編成された特殊部隊なんだ」

久保田と岩村はソファの斜交いに腰かけていた。久保田は岩村の語る話に、最前から耳を奪われていた。

「すると、この世界はたった四日前に作られたコピーの偽物で、あと十日もするとリアルのエネルギーが満ちて、この世もろとも自爆しちまうと言いたいのかい？」

「言いたくはない――が、事実だ」

ううう。久保田はうめいた。

「この世界に送り込まれた十二人のリアルが、そのエネルギーの臨界点に達する前にこの世界から排除する、つまり殺す。それが俺たちの任務だ」

「あとたった十日のうちに」

「当初の計画ではな。ところがそんなにのんびりとして

はいられなくなった」

「？」

「欧米各国が我が国政府をしきりにせっついていているんだそうだ。一日も早くリアルを仕留めないと、核攻撃で日本列島ごと吹き飛ばしてやるとな」

「そんなムチャな」

「奴らのいい分ももつともさ。あの北海道が年端の行かないリアル・チャイルドひとりによつてこの世から消え去った——ブラックホールだから正確には飲み込まれたというべきかな——そのことは各国上層部の誰もが知っている。現在の状況も極東の島国が犠牲になりや済む話なんだから、奴らにしてみりや、やつちまえてなもんさ。現に昨日もリアルが潜伏中の小さな島が、米海軍のミサイル攻撃を受けた。政府には事前通告もなしにな」

「……」

「そんなわけで俺たちも躍起になつてゐるんだが、リアルの中にも優れた奴がいるらしい。ネットのSS広告で仲間呼びかけてやがる」

「ほう」

「これがまた巧妙で、発信元も、広告に応じた奴のアクセスポイントも追跡できないように仕組まれてある。すべてのネットワークをダウンさせない限り、広告を妨害できないときてるから始末に負えん」

「ふーむ。そんなにリアルってのは、特殊な能力を持った人間たちなのかい？」

「そんなことはない。どいつもごく普通の一般人らしい。最初のうちはな」

「最初は？」

「ああ。俺はそのうちのグループをギリギリのところまで追いつめた。ところが奴ら、武器もないのに反撃してきやがったんだ」

「どうやって？」

「こう」岩村は人差し指を立てると、空中で八の字を描いて、「指が動く、炎がムチになって襲いかかってきた。俺は服を燃やされただけで危うく難を逃れたが、何人かが胴体を寸断され、命を失った」

「……………」

「リアルを甘く見ていた。その責任を取らされた俺たちはこのとおり最前線から外され、リアルの実家を監視する役にまわされちゃったのさ。帰ってくるかどうかも判らんのかな」

「俺たち？ オマエの他にも誰かいるのか？」

久保田は腰を浮かすと、辺りの様子をきよろきよろと伺った。

「ハハ、心配するな」岩村はそわそわとする久保田をいとも簡単に笑い飛ばすと「俺の他には相棒がもうひとりいるだけだ。今そいつは食糧の調達に行ってる。おっつけ帰ってくるだろうが、俺がちゃんと紹介してやる」相棒が不在と聞いて、久保田はひとまず胸をなで下ろしたが、心中は穏やかではなかった。

（敵が増えるのは好ましくねえな。この場は早いとこ切り上げて退散するに限る。——とはいえ不自然な退場でイワに疑惑を抱かせちゃつまらねえ。こいつあ厄介だ）しかしそんな心配などおくびにも出さず、久保田は両手を組んで岩村に詰問した。

「で、その話と俺の義姉とが、どう結びつくんだい？」

「ああ、その話だったな」

岩村は体裁悪げにうつむいた。

「——物のはずみだったんだ」

「判るように説明しろ」

「すまない。——じつは本部から、リアルの一ひとりがここに住んでいるとの情報が入ったんだ。光嶋萌黄という若い女性だと。ただちに俺たちはこの家に急行したが、誰もおらず留守だった。いや、猫が一匹いたが、飛びかかってきたんで仲間の一人が腹いせに撃ちやがった。なにしろウチの連中はみな血気盛んなでな。」

不在じゃしかたがない。ひとまず撤退しようとした時だ。この家の主婦が買ひ物から帰ってきて、俺たちを見るやいきなりがなりたてやがっ——スマン、それがオマエの義姉さんだったんだな。

俺は『萌黄という娘がいるな。今どこにいる』と詰め寄ると、彼女はさらに吠えまくった。俺たちの姿を見ても物怖じせずに噛みついてきた。考えてみりゃ当然だわな。帰宅したら娘を狙う強面の男たちが家宅侵入してたんだから。

そのうち彼女が非常ベルを鳴らそうとしたんで、仲間の若いのがスモーク弾を投げやがった。それも転がせばいいものを、彼女に目がけてな。

あとでニュースを見れば、彼女はそれが原因で命を落としたという。——悪かった。現場を仕切っていた俺の責任だ」

岩村は深々と頭を垂れた。

当然、久保田は鬼の形相で岩村をにらみつける。親しい縁者が不当な殺され方をした役回りなのだ。怒ってもあまりあることに違いない。

「イワ、謝って済むこっちゃねえぞ！」

「判ってる。いずれ責任は取らせてもらう」

岩村は床にひたいをこすりつけんばかりに頭を下げる。久保田の知る岩村は、学生の時分から一本気な男だった。

腹を斬ると言えば本気でやりかねない。

いずれにせよ、久保田は精神的に優位に立った。

（あとは頃合いだ。頃合いをうまく見定めなけりや）

久保田は奥底に眠っていた格闘家の血が沸いてくるのを感じた。

（しかし驚いたな。あの萌黄さんが、あんな小さな娘がリアルとかいう、全世界が目の仇にしている存在だったなんて）

久保田はチラッと廊下のほうを見た。萌黄の入った部屋は閉じられたままだ。もう用事は済んだだろうか。もしかすると彼が「帰るぞ」と声をかけるのを待っているのかもしれない。

（あわてるな。仕損じたらおしめえだ）

「ところで久保田、オマエこの十五年、どうやって過ごしていたんだ？」

「——ん？ 俺か」

「大学院に籍を置いたまま、突然の失踪。下宿に『探さないでくれ』と一筆残してあったので、誘拐じゃなさそうだと一応皆は安心していたが」

「バカヤロー。俺みてえな醜い大喰らいを誘拐したって、メンテが大変なだけだぜ」

久保田は苦笑した。つられて岩村も苦笑いを浮かべる。
「俺はずっと、漁師をやってたんだ」

「漁師だど？」

「マグロだ。マグロを捕る遠洋漁業の船に乗っていた。大学院を後にした翌日、和歌山に行つてそのまんまな」

「たまげたね。大転身もいいとこだ。もつとも小さい頃から柔道で鍛え上げ、インターハイ全国制覇をしたほどの身体の持ち主だから想像できなくもないが……。今もやつてるのか？」

「いや、ここ三年は加太のホテルで魚を捌さばいてた」

「やつぱり食うほう担当か」

「置きやがれ」

ようやく友人同士の空気が互いの間に醸成されてきた。「なあ久保田、よかったら聞かせてくれ。なんで大学院を急に飛び出したりした？」

「……………」

「俺たちふたりのどちらが助手の席を奪い取るか——。まだ修士課程の一年を終えたばかりの俺たちを、周囲はそんな目で見ていたのは覚えてるだろ」

「俺はな、イワ」久保田は組んでいた両手を解くと膝の上に乗せ、「限界を感じたんだ」

「限界を——」

「ああ、俺が宇宙物理学に興味を持ったのは、そこに口マンを感じたからだ。理論や理屈なんかじゃねえ」

「……………」

「前途有望だなんておだてられ、オマエと机を並べて、毎日毎日データを分析したり、仮説を立てて検証したり、論文を執筆したり学会に出席したり……そういうのがイヤになっちゃったんだ。——俺の性格には合わなかったんだよ、つまるところ」

「そうか」

「でもな——船の上はいいぞ。仰げば満天の星空だ。大海原にや、じやまする明かりなんてどこにもねえ。宇宙に包まれてる、そんな気分になるんだよ、これが」

「久保田らしいな。後悔はしてないか？」

「ないといえばウソになるな。収入が少ないから食っていくのも精一杯だったしな。落ち着いたのは定職に就けたここ数年のことよ」

「苦労したんだな」

「なあに、自業自得だ」久保田は鼻を鳴らした。「俺のことよりイワ、オマエはどうなんだ？俺がいなくなつてすんなり助手の席に座ることができたんだろ？」

岩村は力なさに首を横に振った。

「覚えてないか？オマエが失踪する直前、研究室に大学を飛び級で上がってきた奴がいたろう」

「そーいーやいたなあ。大学創設以来の天才だか秀才だかと話題になつたつけ」

「助手の席は、やすやすとそいつに奪われちゃったよ。」

伊里江真佐吉という奴にな」

10

（伊里江真佐吉——!?）

萌黄は悲鳴を上げそうになり、口を押さえてどうにかそれをこらえた。

（なんでここで、エリーさんのお兄さんの名が!?）

萌黄は自分の耳が信じられなかった。廊下の先から聞こえてきた話によれば、久保田さんはよりによって迷彩服の岩村のみならず、伊里江の兄とも縁があるというのだから。

すでにファイルの転送は完了していた。

パソコンの電源を落とし、PowerBookをバッグに収めた萌黄は、用が済んだことを久保田に知らせようと、静かに自室の扉を開いた。

そこで聞こえてきたのが、むかし久保田が、在籍した大学院を出奔し、漁師の世界に身を投じた話、そして入れ替わるように真佐吉が現れた話なのだった。

久保田までの距離はおよそ八メートル。萌黄に見えるのは久保田の横顔だけで、斜め向かいのソファに腰かけている岩村の姿は、和室の壁の陰になって見えない。

久保田は岩村の話に心を奪われている。萌黄も真佐吉

に関する情報ならぜひ聞いておきたい。

喉から飛び出しそうな心臓を抑え、萌黄は扉から顔を半分出すと、両耳にその全神経を集中させた。

「なんだ、イワ、その伊里江ナントカさんにオマエ、助手の座を明け渡しちまったのか？」

「まだ助手になる前だ。いや結局俺はなれなかったんだ。……まあ俺のことはいい。問題はその伊里江って奴よ」

「問題？」

「一般には公表されてないが、北海道が忽然と消滅した例の事件、あれは伊里江の仕業なんだ」

「ナニッ!？」

「順を追って話そう。伊里江は俺たち研究室の一員になると、すぐに頭角を現した。アツという間に基礎学問を修得すると、研究室の主要テーマであるブラックホールに関する仮説を次々と提出し始めた。そのペースたるやとても人間業じゃない。わずか一年で指導教授に『参った』と言わしめたんだからな」

「ふーむ」

「当時、俺は思ったもんよ。コイツあきつと未来から紛れ込んだ、進化した人類じゃないかってね。だって奴は決して研究の虫じゃなかった。顔がいいから女の子とも頻繁にデートしていたし、コンサートや映画が好きで会

場や映画館に足しげく通ってやがった。言葉は英仏独伊その他ペラペラで、楽器はどれも玄人はだし。

だから……俺は大学院を辞めちまった」

「辞めた？ オマエも？」

「そうだよ」岩村は苦虫を噛み潰したような顔で「俺が論文一本まとめるのにヒーヒー言ってるそばで、アイツは五本も六本の仕上げていくんだぞ。おまけに学会の査読はどれも一発OKだ。そんな奴が机を並べていてみる、どんなにみじめな気持ちにさせられるか」

「……………」

「俺は研究生活を捨て、日本を飛び出した。もともと旅が好きだったこともあってな。それで世界中をあてもなく放浪しているうちに、気がついたら傭兵学校に入っていた。そこを卒業してからは世界中の紛争地帯を転戦する日々さ。そうして今に至ってるってわけよ」

「はあー、イワのほうが俺よりスゴい人生じゃないか」

「いや、オマエのほうがスゴい」

「どうして？」

「俺、船なんか絶対に乗れない。船酔いするからハハハとふたりのかすれた笑い声が響いた。

「しかし、イワが傭兵とはねえ。なんでまた？」

「まあ、その、成り行きだ」

岩村は人差し指でこめかみをボリボリとかいた。

「それからどうしたい、その天才クンはよ」

「伊里江か……。考えてみればアイツも数奇な運命さ。

我が^{むしろがた}筵瀉研究室始まって以来、第三号の栄誉に輝いたんだからな」

「第三号？」

「第一号は久保田。そして第二号は俺」

「伊里江も研究室を出て行ったのか？」

岩村は下唇を突き出してみせる。

「そのとおり。あまりに突出した才能は、周囲に大きな軋轢^{あつれき}を生む。温厚な筵瀉センセイには到底かばいきれなかったようだ。奴はある日プイといなくなった。そうかと思ったら一ヶ月後、アメリカの某有名大学の教授として国際学会の檜舞台に現れやがった。俺はその頃もう傭兵学校にいたが、ネットニュースで見た奴の顔はアメリカ食が性に合ったみたいで、やたら血色がよかったぜ」

「そりゃあ失踪どころか、大栄転じゃないか」

岩村は「ケツ」と顔をしかめた。

さらに彼は久保田に得々と語って聞かせた。

伊里江はアメリカで着々と研究成果を積み上げ、ノーベル賞候補者と目されるまでになった。そして五年後、

彼は日本に凱旋帰国する。東北の大学が高給優遇で引張ったのだ。彼はそこで研究の集大成を行うはずだった。ブラックホールの謎が彼によって解明されるはずだった。ところが彼は、無尽蔵のエネルギーを生み出すブラックホールを、驚いたことに研究室の中で作り出してしまった。当然石油などの代替エネルギーとして注目された。だが同時に彼の成果を好ましく思わない連中に命を狙われることになった。彼はすべてのデータを持って逃げた。たったひとりの肉親である弟とともに。

「奴は自分を追いつめた連中を憎むあまり、越えてはいけない一線を越えた。自ら作り出したブラックホールに北海道を飲み込ませ、自分の要求を——完全な自由と安全を保証しなければ、次は世界を消滅させると宣言した。政府はその要求を蹴った。そして伊里江が最期の引き金を引く前に奴を捕えるべく、対策本部を設置した。と同時に政府は最悪の場合を想定して、ヴァーチャル世界が誕生後の対応策も検討していた」

「鏡像世界とやらができてしまったんじゃ、もうお終いじゃないのか？ 打開策なんてあるのか？」

「なくもない」

「どんな？」

岩村は両膝をさすると、

「伊里江の性格ってのが、今イチ俺には理解できないん

だが、どうやらかなりお調子者らしい。いや人を人とも思わないというか」

「ほう」

「奴は進んで自らネタばらしを始めやがった。政府に対して、論文のコピーを送ってきたり、研究成果の一端をちらつかせたり。自分はどこにいたのでしょう？　なんてどこかの風景をバックにしたスナップ写真まで送ってくる始末だ」

「変な奴だなあ」

「だろう？　でも次々と送られてくる資料やデータを、我が国が誇る最先端の知性を総動員して解析した結果、いろんなことが判明してきた。

奴が十二人のリアルを種に使おうとしていること。

ヴァーチャル世界はリアル世界を鏡に映したように反転していること。ヴァーチャル世界の住民たちは大怪我をすればたちまち砂と化してしまうこと。ヴァーチャル世界が崩壊してブラックホールへ遷移し、リアル世界を飲み込んでしまうまで、十四日間の猶予があること」

「待て」久保田が手の平をかざした。「するつてえと、種となるリアルを——つまり排除すれば、どちらの世界も助かる見込みはあるつてのか？」

「そう、そのために俺たちは編成された。既存の警察や自衛隊じゃ、この非常事態を任せられないということだ

な。じじつこの世界がヴァーチャルであると知った政府要人や自衛隊幹部らが悲嘆のあまり、辞表を提出したり、行方をくらましたりしてるそうだ。

……おのれの身体がただ世界を破滅するために作られたと知って、まともな精神状態でいられる人間は、そうざらにはいないさ」

「オマエたちは違うと？」

岩村は頷く。

「最初から事情を教えられ、この状況に耐えられる者として選抜された人間の集まりだ。その分、気概は十二分にあるが統率が難しい。バラバラに集められた集団だからな。現に最近、副隊長がクーデターを起こして隊長を拘束した。この新隊長の真崎まぎという男はカリスマ性の強い奴で、手段を選ばないことにかけては天下一品だ。彼のおかげで部隊の士気は数倍に跳ね上がったと言っている。もちろん成果も上がっている。現時点で四人のリアルがこの世から消えた」

（四人も——!!）

萌黄は心臓がひっくり返るほど動転した。

初めて知らされる敵の正体。

彼らによって、仲間の三分の一がすでに消された……。それが事実なら、自分はこれまでよほど運が良かった

のだと言わざるを得ない。

（早く逃げなければ）

気がつくと、萌黄は廊下に足を踏み出していた。

これ以上ここにとどまるのは危険だ。敵に感づかれる前に逃げ出そう。そう思つて久保田に声をかけようとした瞬間――、

「ただいま、遅くなつて済まんな」

ガチャリと玄関扉が開き、入ってきた人間と萌黄の目が正面からぶつかった。

12

食糧の入った袋を両手に下げた女は、靴も脱がずにその場で立ちすくんだ。

「――光嶋萌黄」

女の口が自分の名をつぶやいた時、萌黄は彼女が誰であるのかを思い出した。

（学園前のモデルハウスで、わたしたちをマシンガンで撃った――）

短い髪に今はバンダナを巻いている。太い眉毛は忘れようがない。名前をサキといったはずだ。眉の下の瞳が異様な光を放った時、萌黄は毛穴という毛穴から汗が噴き出すのを感じた。

サキは持っていた袋から手を離すと、左手を腰に延ばした。彼女は迷彩服を着ていない。薄いピンクのTシャツに黒のパンツ、薄手の黒のジャケット姿だ。そのジャケットの下からサキは武器を取り出そうとしているのだ。（またモデルハウスの時の再現や！）

撃たれる、逃げやな――。

思いながらも萌黄は腑に落ちないものを感じていた。

（なんでこんなにあれこれ考えてんのかな？）

萌黄の目はサキの動きを追い続ける。サキの左手に銃が見えた。ふたりの間はわずか三メートル。こんな至近距離で銃弾を浴びたら、伊里江に撃たれた以上の衝撃を受けるのではなからうか？

（また、いろいろ考えてる）

その時、萌黄は相手の異常さに気がついた。

サキの動きがひどくのろいのだ。今も取り出した銃口を萌黄に向けようとしているが、まるで超高速カメラで撮影したフィルム並みにゆっくりと動いている。

（これは、夢？）

夢。幻。そんな言葉が萌黄の心に浮かんた時、彼女は現実感を急速に失い、目の前にある現実に対処するのがわずかに遅れた。

銃の筒先が、まるで戦場にそびえ立つ巨大な野戦高射砲のように、ゆっくりと萌黄のほうに照準を向けてくる。

萌黄はついに事態を理解した。

（時間が、時間がゆっくり流れてる！）

そんなSFじみたことが、という思念を、別の思念が打ち消した。

自分は一度、伊里江の放った銃弾を跳ね返している。伊里江もピンチに際し、ガスを操ることで敵を撃退した。

ヴァーチャルの世界において、リアルは文字どおり異分子である。リアルに何が起こるのか、何ができるのか、はつきりと判ったわけではない。

判ったわけでは――。

サキの銃身が天井の電灯の明かりをガラリと照り返した。その光がようやく萌黄に現実感を取り戻させた。

（あわわ！）

すでに逃げる余裕はない。背中では自室の扉が半ば開いている。すぐに駆け込んでいれば、あるいは第一撃をかわすことができたかもしれないのに。

サキの指が引き金を引いた。

銃弾が飛び出す。

萌黄は反射的に膝の前に下げていたバッグで身体をかばおうとした。

「クッ！」

両腕に思いもよらない荷重がかかった。たかがバッグ

ひとつがなぜこんなに重いのか？　まるで洪水の流れの逆らって、重いタンスを引き上げようとするかのように。

（空気が邪魔してるんや！）

銃弾が迫ってくる。萌黄はバグを構えようと腕に力を込めた。

（そーいやバグの中には――）

ゴスンという鈍い音。

銃弾がバグにめり込んで止まったのだ。

（あー、しもたっ、やってもーたっ）

萌黄は自分の迂闊さに顔をしかめた。

なぜなら、盾となつて彼女を守ったのは、Power Book だったからだ。さっきコピーが終了し、いつでも脱出できるよう、バグに放り込んであったのだ。

（わざわざ危険を冒してやってきた意味がー）

萌黄は撃たれた反動で、そのまま自室の中へと倒れて込んだ。

サキは倒れていく萌黄を、これ以上ないほど大きく開いた目で見つめていた。

（何が起こった？　一瞬、あのコの姿がぼやけたように映ったけど）

サキにとって、リアルとは忌むべき化け物である。いずれこの世界に終焉しゆうえんを招く“種”だからというだけでは

ない。彼女はモデルハウスでその悪魔的な技を目の当たりにしている。

萌黄といっしょにいた、青白い顔の男。奴もリアルに違いない。炎のムチを生き物のように動かして、仲間を次々と殺していったあの男。

あんな存在を許してはならない。この世のバランスを崩すような悪魔は、すべて抹殺しなければいけない。

リアルの世界にいるカレのためにも――。

13

旧友・岩村の話聞きながら、久保田はどこかもしさを拭えなかった。

岩村という男。口を開けば饒舌なくせに、大事なことはなかなか言わない。十五年を経てもその習性は変わらないようだ。

伊里江真佐吉が発明した無尽蔵のエネルギーを生み出す人工ブラックホール。常に資源問題に揺れるこの星に住む我々にとって、それは神のプレゼントだったはずだ。

しかし伊里江真佐吉は、世界のパワーバランスを乱す者として命を狙われる羽目になり、研究成果を持って、弟とともに失踪した。文字どおり失踪だ。

しかし既存のエネルギーにしがみつ়く連中が、それぐ

らいであきらめるとは到底思えない。その後も伊里江兄弟に対する追跡が執拗を極めたろうことは想像に難くない。

七年後、彼は自分たちの人生を狂わせた連中への復讐に立ち上がる。自らの研究成果を、北海道をいとも簡単に消してしまうことで誇示し、それでも要求を受け入れない政府に対して、ついには押してはならないボタンを押してしまった。その結果、鏡像世界なんてのが即席にできあがり、十二人のリアルとかいう自爆装置付きの人間がそこに送り込まれた、という。

ここまでの話を、そのまま受け入れることは、さすがに久保田にもできなかった。

この世界は、じつはオリジナルを裏返しにコピーされたまがい物……。

受け入れるにはあまりにも荒唐無稽に過ぎる。

たしかに、あらゆるものが裏返しになってしまえば、その世界の住民自身、おのれが裏返ったことに気づく手がかりは皆無といえるだろう――。

岩村たちは、いわば暗殺部隊であり、十二人のリアルを始末するためだけに集められた。伊里江真佐吉の狂った暴走をくい止めるにはリアルをすべて抹殺するしかないという。

（待て。イワは“しかない”とは言わなかった）

岩村は現状を打破する方策を訊ねられた時、「ある」ではなく「なくもない」と、もったいぶった答え方をした。

しかも一瞬の言い淀みを久保田は見逃さなかった。

（コイツ、奥歯に何をはさんでやがるんだ！）

早くここから退散すべきだと頭では判っている。しかし、腑に落ちない話を聞かされっぱなしで旧友に別れを告げるのは、どうにも抵抗があつた。

（ひょっとすると、俺に伝えたいことでもあるんじゃないのか？）

いつそこちらから誘いをかけてみよう。そう思つて口を開こうとした時だった。

「ただいま——」

突然、玄関の扉が開き、女の声が聞こえてきたのだつた。

（クソッ、仲間のお帰りか！）

岩村が腰を浮かせる気配を見せたので、久保田も廊下に目を転じた。

（げっ、萌黄さん!?）

なんたること、萌黄と女とが鉢合わせしている！

女は両手から荷物を離し、いきなり小型銃を抜き放つと、萌黄に向かって問答無用で発射した。

こもった銃声が久保田の耳を打った。撃たれた萌黄は

反動を受けて自室に倒れ込み、久保田の視界から消えた。岩村が弾かれたようにソファを蹴ったが、久保田の動きのほうが速かった。彼は廊下に飛び出すと、岩村より先に玄関へと突進した。

銃の照準から目を離したサキは、足音を立てて迫りくる男に、一瞬ひるんだ色を見えた。

光の加減か、彼女には男がサイか象のようにも映った。日頃に似合わぬことだが、サキは恐怖のあまり、無我夢中で銃を向けていた。直前に見た萌黄の不可解な挙動が、彼女から冷静さを奪っていることに気づく余裕もなかった。

「うわっ、やめれ」

銃口の暗い穴を突きつけられて、久保田の足がもつれた。

パンツ、パンツ、パンツ。

銃声は三度鳴り、一発が久保田の耳たぶに当たった。痛みが走り、体勢が崩れる。

「がはっ」

久保田の背中越しに岩村の咳き込むような声が聞こえた。

（イワにも当たったのか!?)

だがそれを確かめる間もなく、久保田は肩から廊下の右に開いていた和室へと倒れていった。

サキは動転していた。両目は焦点を失ったように壁際を徘徊した。

ちよつと不在にしているあいだに、光嶋家は見知らぬ人間たちに占拠されていた？ 岩村はどうした？

疑問が渦を巻いてサキを飲み込もうとする。だが彼女の身体は課せられた使命を果たすべく、無意識のうちに動いていた。

リアルを殺す――。

サキは萌黄の部屋の入口に仁王立ちした。部屋のなか、カーペットの上で萌黄はバッグを放り出したまま倒れている。

（とどめを刺すぞ！）

サキは再び銃を構え――撃った。

14

萌黄は両足を揃えたまま、まるで仏像が押し倒されるように背中からカーペットの上に倒れていった。

衝撃は大したものではなかった。

萌黄の手足といわず、胸や腹や首筋といわず、頭も顔

までも、すべてが火照^ほっている。風邪をひいたときの火照りかたとはまったく違う。宇宙服を着ているような温かさで表現すれば近いだろうか。実際に着たことはないけれど。

倒れた際に机の角で頭を打ったらしいが、かすかにチクツと痛みが走っただけで、尾を引くことなく、痛みは遠のいていった。

（これがリアルの防衛本能???）

おそらくそうなのだろう。萌黄はいま身をもってそれを体験しているのだ。

（けど動きづらい）

起き上がろうと肘をカーペットの上に突っ張ってみた。ところが身体を包む見えない防護服のようなものが、逆に動きを阻害しているのだ。

「死ねエーっ」

女の声が叫んだ。

ハッと正面を見上げた萌黄とサキの視線がぶつかった。パンツ。

発射音。続いてみぞおちにボーリングのボールを落としたような鈍く重い圧力。あの時、伊里江に撃たれた時とまったく同じだ。

萌黄は呼吸できず、のたうち回った。銃弾は跳ね返せたようだが、受けた衝撃を耐えるのは、涙を流すほどつ

らい。

萌黄の腹の上から銃弾が転がり落ちた。サキは呆然とカーペットの上の銃弾と狙った萌黄の腹を見比べていた。
(やはり、リアルは化け物か。ならば！)

サキは羽織っていたジャケットをバツと脱ぎ捨て、ベルトで背中にまわしていたマシンガンを手にとった。

「弾の大きさも威力も比較にならん！　これでお終いにしてやる！」

銃など効かないと知って攻撃をやめてくれれば。そう考えた萌黄は、自分の甘さを思い知らされた。

相手が構えたマシンガンは、見ただけで卒倒モノである。あんなもので撃たれたら――

(耐えられる自信、ない)

しかも萌黄は気づいていた。身体をやわらかく包んでいた防護服のようなものが消え始めていることを。

(むん、わたし、ここまでみたい)

サキが引き金にかけた指を動かそうとした。

(ああ……)

まさにその瞬間だった。思いがけない声が萌黄を驚かせた。いや声というより、咆哮ほうこうといったほうがいい。

《ガオーンッ、グアオーンッ》

モジの雄叫びだ。萌黄のP A Iであるモジが、ポケットのなかの携帯電話から飛び出してきたのである。それも通常の規格にはない大きさに投影されて。

ギドラの仕業に違いない。おそらくギドラが携帯のプログラムを書き換えることで違法改造したのだ。

モジは実体のない3D映像である。だが思いがけない局面での登場に、サキは照準から顔を離して、呆然と怪獣の動きに目を奪われた。

だがそれも束の間、「ケツ、P A Iかよ」と吐き捨てるように言うと、すばやくマシンガンを構え直した。

「ゴジラといっしょに往生しろ！」

久保田も助けにこない。P A Iでは盾にもなってくれない。萌黄はついに観念して目を閉じた。

すると、

《目を見開くんだ！　ちゃんと銃弾を見てなきや！》

それはギドラのささやきだった。

（えっ？　目を？）

言われるままに^{まぶた}瞼を開くのと、連射された銃弾が^{あられ}霰のように降り注ぐのが同時だった。

《食ーーーーーてーーーーまーーーーうーーーーぞーーーー》

モジの声が間延びして聞こえてくる。

何発もの銃弾が、蛍光灯の明かりをにじませながら、ゆつくりと萌黄に接近してきた。

（また時間がスローになつとる）

今はそれが萌黄自身が引き起こした現象であると彼女にも判っている。彼女の六感が、脳が、高速度で情報を処理しているのだ。

（逃げやな！ でもどこへ？）

サキはマシンガンを振り回すように撃ちまくった。銃弾は萌黄の周辺に広く着弾しようとしている。これでは逃げるところなどない。

“銃弾を見ろ”

ギドラはそう言った。

（そうか、銃弾に全神経を集中させることで、時間をコントロールできたんや）

萌黄は、逃げる考えを捨てた。そして身体に当たるおそれのある弾の個数を数え始めた。

（……五、六、七発！）

萌黄は七つの弾が当たるであろう身体の部位に、残り少ない防護服のエネルギーが集まるよう、心を集中させた。どうすればそんなことができるのか、皆目判らないが、ただ頭のなかでそうなるよう念じ続けた。

（跳ね返せ、跳ね返せ、跳ね返せ……）

すると、奇怪な現象が起こった。

萌黄と銃弾のあいだのわずかな空間が、赤く染まり始めたのである。

これは一体、と不思議がつている猶予はなかった。萌黄はただ一心不乱にその部分に視線を注ぐ。

空間の赤味は急速にその濃さを増していった。迫る銃弾との距離に反比例していることは疑う余地がない。

茶色になると、さらには金色に輝き始めた。

（当たる――!!）

ここまでか、と眩しさに目を閉じようとした時、何百枚ものガラスが一度に割れるような音が部屋じゅうに鳴り響いた。

何が起ったのか、サキは理解できなかった。

ただ、彼女の身体を貫いた七つの弾痕から、真っ赤な鮮血がほとばしり出ていることだけは判った。

15

バランスを崩したところに、たまたま和室の入口が開いていたのが久保田に幸いした。

傭兵でも兵隊でもない、単なる漁師あがりの板前だった彼に自慢できることといえば、インターハイを制した柔道ぐらいなものである。とっさにひるがえした身体はそのまま狙撃者の死角へと倒れ込んだ。

「クツ、痛え」

畳の上をだるまのように転がった久保田は、そこにあった和簞笥の縁に頭を打ちつけた。軽い脳震とうが彼を襲う。が、それもわずかな間で、すぐ膝について立ち上がると、

「萌黄さん！」

と、ふらつく頭で一声叫んだ。

しかしマシンガンの連射音が廊下に反響し、直後、ドサツと重いものが床に落ちる音がすると、ああつ！と絞るような声が彼の喉から漏れ、上がりかけた膝が畳の上に落ちた。

（やられたか!?）

久保田は四つん這いで入口ににじり寄った。こわごと廊下を覗き込んだ目に映ったのは、壁に背中をつき、両足を投げ出して座り込んだ女の姿だった。そばにはマシンガンが落ちている。

女は全身に痙攣けいれんを起こしながら、何もない宙を凝視している。まるで信じられないものを見てしまったかのよう。

久保田は呆然とした状態から立ち直ると、和室を飛び出し、急いで女のマシンガンを取り上げた。

あらためて久保田は事の不可解さに驚いた。女の身体にはいくつもの穴があいており、そこからこんこんと血が湧き出している。

（萌黄さんが撃ち返したのか!）

萌黄もピストルを持っていた。それで彼女も反撃したのだろうか。

そう考えたのも束の間、久保田は萌黄の姿を追って、彼女の部屋に向き直った。

相撃ちで萌黄も血まみれに――。

細めた目を室内に向けた久保田は、そこに無傷で倒れている萌黄を見て、おお！ と心の底で大きな声を張り上げた。

「萌黄さん――あんた無事なのかい？」

気のせいか、久保田の目には萌黄がまばゆく輝いて見えたが、それは一瞬のことだった。

萌黄が薄目を開けて、反応を見せた。

（しかし、どういうこっちゃ、こりゃあ）

久保田はうならずにはいられなかった。

それは異様な光景だった。

萌黄の周囲には無数の弾痕があいている。カーペットの上にも机の引き出しにも。それらが女の撃ったものであることは疑いようがない。

だが萌黄の寝そべっていた場所だけは、何の痕もないのはどういうことか？ しかも彼女は持ってきたはずのピストルを握ってはいなかった。

すぐそばにバッグが落ちている。加太の女将が彼女に

パソコンを渡した時に持たせたバッグだ。その真ん中には黒々と丸い穴が空いている。

「ク……クボラしゃん」

まわらない舌で萌黄が彼の名を呼んだ。久保田は我に返り、膝を折って彼女に顔を近づけた。

「どこか痛いところはないかい？」

「ううん、へいひ（平気）」

萌黄は身じろぎし、なんとか起き上がろうとするが、体中が痺れてでもいるのかうまくいかない。

久保田はとりあえず萌黄の無事にホッとすることにした。手を貸して、彼女の上体をベッドにもたせかけてやると、

「パホホン、ほわれれもーた（パソコン、壊れてもーた）」

萌黄は泣き笑いの表情を浮かべている。

「そうか、あのバッグに入れたんだね。君の盾になってくれたのか」

それでも理解できない、と久保田は首をひねる。まさか雨のように降り注ぐ銃弾をすべてパソコンで跳ね返したわけでもあるまいに。しかもバッグの貫通孔はひとつ――。

「サキッ」

背後で岩村の声が女を呼んだ。振り向くと、岩村は両

手で女を抱いていた。

「おい、しつかりしろ！」

岩村はサキの銃創を確かめようと、彼女のジャケットをナイフで切り裂き、Tシャツをたくし上げた。

久保田にもサキの傷口が見えた。流血はすでに止まっていたが、傷口からは真っ赤に染まった砂がこぼれ落ち、その周囲は土気色へと変色の輪が広がっていた。

「サキ、死ぬな、俺を置いていくな！」

その声にサキの顔がピクツと動いた。サキの目が岩村の顔に焦点を結ぶと、

「——よお、イワ、いたのか」

「いたのかじゃない！ お前が帰ってくるのを腹すかして待ってたんじゃないか」

「——スマンな、閉まってるコンビニに忍び込んで、ようやく手に入れてきたんだ。ほら、イワの好きなッえびせん”もあるぞ」

岩村の目からは涙があふれていた。

（そうか、イワの奴、この女のことを……）

しかしサキの命がまさに消えようとしていることは明白だった。

「サキ、ゆうべ言ってたよな？ 遠いところに好きな奴がいると。そいつに伝えてほしいことはあるか？」

「——なんだよ、つまらないことを覚えてやがるんだね、

この男は」

サキは岩村の腕の中でかすかに微笑した。

「——その人は」

突然、サキは苦痛に顔を歪めた。

「おい！」

岩村がサキを強く抱き寄せた。すると痛みが治まったのか、サキはいくぶん表情を和らげ、

「——その人はね、ずっとずっと遠くにいるんだ。わたしの声なんて届かないくらい遠くにね」

「遠距離恋愛か。サキらしくもない」

「——彼は、リアルの世界にいるんだよ」

岩村は口をつぐんだ。こういうことだという顔をしている。

「——彼とは傭兵学校に入った時からずっといっしょだった。困った時や悩んだ時、いつもわたしを助けてくれた。——優しいくせにそう思われるのがイヤならしく、会えばいつも喧嘩ばかりで。——そんな時はえびせん渡してやればニコニコするんだから、子供っぽいよね」

「……………」

岩村は硬直したまま、無言でサキの口許に目を落としている。

「——わたしがこの部隊を志願した理由は、彼を守るためさ——リアルを全部消せば、元のリアルの世界は壊れ

ないで済むんだろう？ そしたらリアルの私はずっとその人のそばにいられる」

「お、俺も……じつはお前のことが、ずっと……」

岩村は咳き込んだ。そんな岩村にサキは微笑みかける。「——知ってたさ、あんたの気持ち。いつ言ってくれるんだろうと思って待ってたのに、いまわの際に聞かされるとはね」

長年の戦友は、いま初めて、互いの真つすぐな視線を絡め合っていた。

「サキひとりで三途の川を渡らせたりはしないよ」

岩村は左膝を前に出した。しかしそのズボンの裾は異様に平べったい。彼が裾を上げると、そこにはあるべき足首がなく、ふくらはぎの辺りから砂になった肉体がぼろぼろと崩れ落ちていた。

「——イワ、それ、わたしの撃った弾が……」

岩村は、へへっと笑った。

久保田はじつと動かなかった。萌黄にも口に指をあてて合図すると、カーペットの上にあぐらをかき、旧友岩村の背中に視線を固定させた。

久保田はいま萌黄とともに彼女の部屋にいる。開いた

入口には岩村の後ろ姿が見える。岩村は倒れた仲間の女を介抱している。おそらくそう長くはもたない、サキという名の女性を。

彼らは萌黄が“迷彩服”と呼ぶ、リアル暗殺部隊に所属している。すでにサキには萌黄の正体がバレている。一刻も早く逃げたい状況だ。

だが肝心の部屋の入口には岩村が陣取っている。おそらく岩村も武器を帯びていると思われる。

半ば朦朧^{もうろう}とした萌黄を連れて、岩村の横をすり抜け、うまく逃げるができるだろうか？ かなり難しい。

ところで岩村は、サキに駆け寄った時こそ久保田たちに鋭い視線を投げたものの、以後は全く気にかける様子もない。いやそれどころではないのだ。

岩村の腕のなかで、彼の愛する女性が命の炎をいま消そうとしていた。

そして岩村自身の身体も――。

「わたしのせいだな、その脚――」
「言うな」

サキの言葉を遮ると、岩村はまくり上げたズボンを下ろした。彼の左脚の砂状化はすでにふくらはぎに達している。流れ弾の当たりどころが悪かったのだ。

「なるべくしてなったんだ。気にすることはない」

岩村の苦痛は相当なはずだが、そんな気振りはおくびにも出さず、ひたすら彼の腕に身を委ねるサキを思いやっていた。

「俺たちがこんな任務を請け負ったこと自体、まちがいだった気がする。そうは思わないか？」

「そうだね。リアルだったって、元はただの民間人なんだから、わたしらみたいな傭兵のプロがやる仕事じゃな——」

ゲホゲホッとサキが砂を吐いた。彼女の首筋や手からはすでに肌つやが失われ、指の何本かは付け根から床にこぼれ落ちていた。

「イワ、わたしを抱いてて」

「判ってる。ずっとこうしてるから」

今度は、岩村の左膝がザザッと裾から流れ出た。彼は歯を食いしばってその痛みに耐えている。

「イワ」

「なんだ？」

「向こうのあんたは——告白してくれるかな？」

「ああ、するさ。俺が連絡してやる。おまえら相思相愛なんだってな」

サキの顔がみるみる土に変わっていく。瞳からも光が消え失せた。

「わたし——」

「おう？」

「わたし——あんたの子供が欲——」

せまい空間に白い竜巻が起こった。久保田の目にはそう見えた。霧のようなものが渦に乗って舞い上がると、竜巻はあつという間にどこへともなく消えてしまった。

あとには砂になったサキをかかえた岩村がいるだけだった。

彼は床の上にそつとサキの亡骸^{なきがら}を置いた。サキの唇には彼女が最後に言おうとした言葉が名残^{なごり}をとどめていた。

「久保田」

「——ここにいます」

岩村はゆつくりと顔を向けた。

「大学に戻れ。筵瀉^{むしろがた}先生のもとへ」

「——教授の？　なぜ？」

「これはトップシークレットだが、先生の研究室では伊里江の野望を砕く方法を探って、奴の研究成果である人工ブラックホールを再現しようとしている」

「……………」

「ところが、十日やそこらじゃとても間に合いそうになーらしい。——ただ副産物として、元の世界と鏡像世界をつなぐ道が開けそうだと聞いた」

「ええっ!？」

大声で反応を示したのは萌黄だった。ふらつく身体で前で出ると、両手をカーペットについたまま、岩村の顔に見入った。

「——そうだ」岩村は苦しげに息を継ぐ。「リアルを殺す必要はない。そこから元の世界に送り返してやればいい」

「そうか、判った」

久保田は何度も頷いた。おそらく岩村はこのことを話したかったのに違いない。まさか久保田が息子と偽って連れてきたのが、当の光嶋萌黄とは知らなかっただろうが。

「——萌黄——さん」

岩村は萌黄に向けた。

「はい」

「あんただろう？ 不法なSS広告で仲間を募集してるのは？」

「……そうです」

「——ちょうどよかった。まだ生きてるリアルを集めたら、いっしょに元いた世界に帰りな。そうすりゃ万事メデタシだ」

萌黄は、わかりましたと答えた。

「銃弾を跳ね返したあんたなら、生き延びられるだろう。久保田を信頼してついていけ。そいつは頼りになる」

「イワ！」

久保田は友人に駆け寄り、彼の両肩を支えた。

岩村の顔や手は鉛色に変わっている。おそらくもう限界だろう。

「萌黄さ……」

「はい」

「人類の未来を……君に……託す」

その時、岩村の顔が強ばった。内臓が砂になり、心肺機能が停止したのだ。

「モウ……ヒトツ……俺二伝エテクレ……サキヲ——」

ごそつと身体が揺れたかと思うと、岩村の頭部は縦に割れ、そのままサキの亡骸の上に落下した。

萌黄の悲鳴が夜のとぼりを切り裂いた。

久保田は気を失った萌黄を背負ってマンションを出た。むんの運転するライトバンがすぐ明かりをつけ、近寄ってきた。

萌黄は後部座席に寝かされた。

久保田は路上から六階を振り仰ぎ、両手を合わせて岩村とサキの冥福を祈った。そして運転席に座るとすぐにライトバンを発進させた。

「……萌黄さんのファイルは？」

伊里江が問うと、久保田はアゴでバッグを指し示した。

伊里江は穴のあいたバッグからパソコンを取り出すと、口をぽかんと開けて、激しく歪んだパソコンとバッグの穴を見比べた。

「ダメだろう？ 無駄足だったな」

久保田が残念そうに言うのと、伊里江は首を横に振った。

「……おそらくハードディスクは大丈夫だと思います。

うまく筐体きょうたいを取り外せば」

「そうか——なら、分解するのにとっておきの場所を知ってる。夜も遅いが、これからすぐに向かおう」

四人を乗せたライトバンは、進路を京都に向けた。

〈第十一章につづく〉